

## 早稲田大学 第二文学部 古文 講評

### 〔総合分析〕

出題形式	マーク式
試験時間	国語 90 分
出典	『泊酒筆話（ささなみひつわ）』随筆 清水浜臣(しみず はまおみ)著 六 県居翁へ有栖川家より御歌賜ひし話 ほぼ全文
解題	<p>清水浜臣による、随筆。国学・和歌に関する記事、全三十五条からなる。賀茂真淵・加藤干蔭・村田春海ら県居門の逸話が大半を占める。文化十(1813)年刊。</p> <p>清水浜臣(しみず はまおみ) 江戸後期の歌人、国学者。村田春海(はるみ) 門下。江戸古学の伝統を伝えた功績は大きい。安永五(1776)年～文政七(1824)年。</p>

### 〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
(三)	問十六 〈傍線部訳〉	傍線部Aは「奥処(おくか)・「とむる」の意味を文脈から読み取れるかが鍵。本文中の『冠辞考(かんじこう)』(枕詞辞書・賀茂真淵著・宝暦七(1757)年成る)の文学史的知識も手掛かりとなるであろう。傍線部Fは「やむごとなき」・「ずば」の解釈がポイント。殊に「ずば」が仮定条件を表すことが分かれば、選択しやすい。	標準
	問十七 〈語釈〉	副詞「いかで」の語義を問うものであるが、単語帳などで丸暗記した知識のみからの解釈では判断を誤るかもしれない。文末との呼応関係を認識した上で解釈をする必要がある。とはいえ、「いかで」に関して、この手続きを行うべきことは必須の判断基準である。傍線部Bは命令形、つまり未定の内容と呼応して「ドウニカシテ・ナントカシテ」の意、傍線部Hは文末は推量の助動詞「む」であるが、反語の用法。選択肢については、イは疑問の用法、ロは文中に係助詞「かは」が含まれるように反語の用法、ハは文末は推量の助動	

<p>問十八 〈整序問題〉</p>	<p>詞「む」と呼応するので疑問の用法。 ここ近年、早稲田大学の他学部でも多く見られる、早稲田大学特有の設問。第二文学部では99年度『十訓抄』・02年度『讃岐典侍日記』に続いての出題。自立語・付属語の順序、常套句などを足掛かりに文法的な接続関係を判断する。なお、完成した形は、「のたまは—せ—しか—ば」。</p>	
<p>問十九 〈和歌の修辞技巧〉</p>	<p>正解の枕詞の「とりがなく」は頻出する修辞技巧でなく、また、その他の選択肢についても判断に迷うもの、特に選択肢イが「適当なもの」と思われそうであるが、地の文との対応をとらえれば、間違った選択肢の消去は可能であろう。</p>	
<p>問二十 〈敬意の対象〉</p>	<p>設問形式としては頻出。第二文学部では01年度『とりかえばや物語』問十九、00年度『藤簍冊子』問十七に出題されている。敬語の種類は誤ることはなからうから、設問の中心は、尊敬語のE・Gは主体、謙讓語のIは客体がとらえられるか、にある。</p>	
<p>問二十一 〈内容一致〉</p>	<p>本文との対応箇所を見出すより、本文に記述のない内容を含む選択肢を消去する方法が効率的かつ正確であろう。設問に「伊藤主膳の真の目的」とあるので、伊藤主膳の行動を中心に本文の内容を追えばよい。</p>	

### 〔総合コメント〕

99年度『十訓抄』が950字強、00年度『藤簍冊子』が約800字、01年度『とりかえばや物語』が1000字強、02年度『讃岐典侍日記』が650字強から見て、本年度の『泊泊筆話』は900字弱で平均的な本文の長さであった。出典については、受験生には馴染みの薄いものではあったが、説話のような、読みやすい文章であったろう。設問形式は、十八問を除けば、典型的なもの、難易度は第二文学部の平年並みであったと言えよう。